

地域と連携した防災・減災への取組 ～生徒の気づきから「防災講座」へ～



栃木県立学悠館高等学校JRC部
顧問 大島 喜美子

1 はじめに

本校は平成17年に開校した定時制課程と通信制課程をおく単位制の高校です。点字ブロック・多目的トイレ・エレベーター・雨水貯蓄タンク・太陽光発電装置など、災害時防災拠点となるための様々な設備を有し、栃木市の「広域避難場所」に指定されています。

JRC（青少年赤十字）部は開校時に創部され、柱となるための防災活動のほか、街頭募金、河川や地域清掃等、青少年赤十字の「気づき 考え 実行する」態度目標を具現化する活動を行っています。

2 生徒の「気づき」が、地域と連携した「防災講座」へ

平成19年、一人の生徒から「災害時にどの

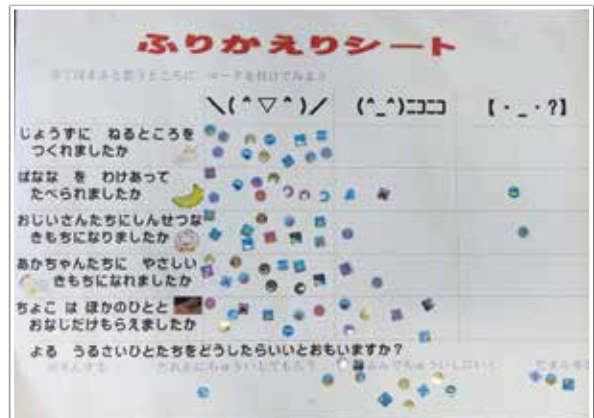


避難所としての活用プラン（平成19年）

ような避難所運営ができるのか」という問題提起がなされ、部の活動として避難所運営プランを検討しました。危機感の不足、防災意識が低い実態を知り、学ぶ機会や地域への情報発信の必要性を感じたことから、平成20年に栃木市・日本赤十字社栃木県支部との連絡会議を経て、平成21年から対象や条件、視点を変えて様々な体験や研修をする防災講座を年に数回実施しています。



学悠館JRC部防災講座「避難所体験」



小学生の防災講座のふりかえりシート

3 防災意識が変化する契機となった東日本大震災

学校祭で避難所運営プランを発表して3年後に発災した東日本大震災では、生徒の活動

場面はなかったものの本校も一夜の避難所となり、約200の方が避難してこられました。7月には、生徒の発案から宮城県石巻市へボランティアに赴き、以来、平成29年まで本校単独で住宅や農地の「がれき」撤去や視察研修、日赤関係で被災地の高校・避難所訪問を実施してきました。甚大な被害を目のあたりにして、備えること、自助・共助の大切さを痛感し、また減災のための防災講座の必要性・重要性を再認識することとなりました。



宮城県石巻市でのボランティア活動（平成23年7月）

4 条件・場面・対象を変え、地域のニーズに合わせた防災講座

震災後、一般市民の防災意識が高まったことにより、発災前に比べ参加者が急増したと同時に、組織的な防災を考えたいという地域の要望に応える形で防災講座の依頼も増えました。地域のニーズに合わせてつづき、被災地ボランティア報告会や自治会への出前講座を展開するとともに、様々な場面を想定するシミュレーション型の防災講座も実施し、よりリア



高校生ボランティアアワード2019での発表

ルな疑似体験も行いました。

5 活動報告ならびに防災・減災の必要性の発信

平成24年度には、「第16回防災まちづくり大賞 消防庁長官賞」を、平成25年度には、内閣府主催の「防災教育交流フォーラム」でも活動発表の機会をいただきました。

また「山の日記念全国大会」や「高校生ボランティアアワード」の全国大会でも展示・発表の機会をいただきました。平成30年度には、「文科省学校安全総合支援事業」の拠点校に選出され、専門家の指導をいただき、避難所運営の在り方について、市内高校代表生徒とともに活動の幅が広がる学びを得ました。「栃木県防災・減災シンポジウム」では、多くの方に本校の防災活動を紹介し、防災・減災の必要性を提言する貴重な機会となりました。



栃木県防災・減災シンポジウムでの活動報告(平成31年2月)

6 今後の展望

今、減災に不可欠な「共助」の礎となる地域のコミュニティ・人間関係づくりにも有用なアイスブレイク、リラクゼーション、食の楽しみや変化を持たせるためのおいしい非常食の研究など、「居心地の良い避難所」に向けた防災講座の企画に取り組み始めました。今後は、不易流行、先輩からの活動を引き継ぎつつその時代に合ったニーズと活動の中で自分たちが見出したニーズの中から、地域の方とともに新たな防災活動を展開していく予定です。